

少年期の生活体験学習と家族学習の創造

猪山, 勝利

<https://doi.org/10.15017/9043>

出版情報 : 生活体験学習研究. 4, pp.19-23, 2004-01-30. 日本生活体験学習学会
バージョン :
権利関係 :

少年期の生活体験学習と家族学習の創造

猪山 勝利

Creation of Family · Learning by Life— Experience Learning for Boy · Girlhood

Iyama Katsutoshi

要約 生活体験学習の社会的意義を明らかにする一環として、少年期の生活体験学習が現代家庭教育、すなわち「家族学習」の創造に果たす役割を両者の学習内容を対応させて論究した。

キーワード 少年期 生活体験の社会的意義 生活体験学習の性格と内容 家族学習内容

1. 問題の所在と研究視角

本稿の目的は、少年期の生活体験学習研究の一環として、生活体験学習の社会的意義および役割に関する基本研究課題を提起することにある。

筆者は本学会誌創刊号に生活体験学習の現代的內容に関する試論や社会教育誌に展開論を提起したが⁽¹⁾、多くの体験学習研究と同様にこどもの発達の意義を主体としたものであり、生活体験学習の社会的意義や役割の考察は弱体であった。本稿は、生活体験学習が果たす社会的意義や役割を現代家庭の再生に連関させて基本課題を提起し、これからの生活体験学習研究の発展的課題を明らかにしたい。あわせて、従来の教育学研究に欠落しがちであった教育が果たす社会的意義や機能を明らかにする研究視角についても若干の問題提起をしたいと考える。

筆者は、本誌創刊号において現代的な生活体験の内実を把握する基本視角として、(1)生活文化性、(2)こどもの生活主体性、(3)創造的実働性、(4)個・協同性を析出した。しかし、その視角は生活体験研究の教育学的性格、すなわち、こどもの発達における生活体験の現代的意義を明らかにする研究視角であり、生活体験学習

の社会機能性についての研究視角は希薄であった。本稿はその欠落を補完する試論を提起することを課題としている。

上記の課題に限定しても、研究課題は多様にあるが、筆者は以下の課題を試論的に提起したい。

課題の1は、こどもの生活体験学習のうち「少年期」を主体とする研究視角である。

課題の2は、生活体験学習の家族学習の再生に果たす意義と役割の問題である。

2. 生活体験学習における「少年期」の設定

これまでのこどもの生活体験学習の研究において、いわゆる学童期といわれる発達段階、すなわち小学生を対象とした実践研究は多様になされてきた。さらに、思春期と規定される中学生の生活体験学習の実践研究も少ないが蓄積されつつある。しかし、独自の「少年期」として措定した研究は管見するところ皆無に近い。したがって、生活体験メニューとこどもの発達発達段階の関連性について言及されることは少なく、道徳的「心」育成という大まかな関連性が指摘されがちである。

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

〒852-8144 長崎市女の都1丁目1584-7

K. IYAMA (Menoto 1-1584-7, Nagasaki City, Japan 852-8144)

このような研究状況が生じているのは、種々の要因がある。

ひとつは、学校教育主導の教育システムがもたらしている要因、すなわち、こども世界の「学校化」が規定している要因である。すなわち、学齢期以前の乳幼児期、小学生の児童期、中学生期の思春期、高校生以上の青年期というように学校在学性を主体に対象把握をする視点である。この視点は、児童期後期から思春期におよぶ少年期の発達段階の全発達性を把握できがたくしている視点である。加えて、心理学においても青年期の発達拡散を指摘したエリクソン以降明確な発達段階論は定立されておらず、極言すれば、ハヴィガースト的児童・青年期概念に低迷しているのが現状である。

もうひとつの要因は、生活体験の内容構造とその発達の意義が体系化されておらず、体験の分析でも実践の「感想アンケート分析」にとどまっていることが多いためである。

本節では、発達段階として「少年期」を設定してきた先行研究を管見し、筆者の生活体験と関連した少年期概念を提起したい。

教育社会学の立場から、精力的に「現代青少年」論を提起している柴野昌山は『現代社会の青少年』（1980年）、『現代の青少年』（1990年）において、社会学的概念として「少年期」を析出しており、小学生の中期から青年前期に当たる5、6年が少年期に相当すると規定しているが、その特質であるギャングエイジ性、家庭から社会への志向をあげるのみで、その発達段階の総合的把握は青年期に比べて希薄である。

ところで、教育学において「少年期」を独自の発達段階として定立した嚆矢は、岩波講座『子どもの発達と教育』〔5—少年期〕（1979年）である。巻頭論文「少年期における発達の特徴と教育」を執筆した坂元忠芳は、乳幼児期と青年期にはさまれた少年期を意欲的に析出しているが、そこでも前期—小学生、後期—中学生とし、やはり学校教育視点を継承している。近年、生活指導論の視座から「少年期」の形成論を意欲的に提起している竹内常一は、少年期3部作『子どもの自分くずしと自分づくり』（1987年）、『少年期の不在』（1998年）、『子どもの自分くずし、その後』（1998年）

を著し、少年期の発達の問題構造を「からだところろ」

を統合して解明し、少年期の人格再統合課題を総合的に解明している。竹内は、学校過剰適応と教育家庭適応過剰の中で「少年期」を喪失している子どもが現状を乗り越えていく基底として、あらためて親密集団を通じた人格的自立を提起している。しかし、彼が希求する人格的自立を可能にする教育空間が、依然として学校、家庭に限定されていること、少年期を学校教育主体の学習発達期としているために、少年期の現代的再生を総合的に展望する言説を提起しているとはいえないように思われる。

筆者は、現代少年期を人間的、社会的な主体性を学習・実践的に形成する「人間的、人格的自立期」であると把握する。したがって、少年期の生存空間は家庭、学校に限定せず、地域社会・社会空間に拡充し、その「全生活参画性」から再生していくことを現代少年期把握の視角として設定することを提起したい。

以上の視角を基底として、筆者は現代少年期を次のような視点から、把握する。

第1に、学校在学性にとらわれず、人間的自立期を迎える10才前後から14、5才までを少年期ととらえる。

第2に、こどもを成人との対比で発達未発達性を特質とし、学習者性に限定する視点を超えて、人間的、社会的主体ととらえる⁽²⁾。この点については、20世紀を超える「こども観」を新たな創造と関連させて論じる必要があるが、ここでは省略する⁽³⁾。

第3に、第2の視点とも連動するが、少年・少女は学習者であるだけでなく、生活・社会的活動者として位置づける。

第4に、少年期の学習や活動は社会的補助や既存文化の継承だけでなく、内容によっては現代的創造としても展開する。特に、生活文化を含む文化学習や活動、環境学習や活動、情報学習や活動、国際交流学習や活動などの諸側面では少年・少女の創造性は高い。

3. 生活体験の社会的意義

筆者は、生活体験学習の意義を通学合宿の分析をとおして、3つの側面を問題提起したことがある⁽⁴⁾。

第1は、こどもの発達の意義である。

第2は、教育システムの意義である。

第3は、社会的意義である。

生活体験の意義に関する研究の大半は、こどもの発

達の意義に関する研究であるが、今後、第2や第3の側面の研究が開発・促進されていくことが求められている。

欧米の教育学においては、第3の側面は、階級論や階層論の視点から多くの研究がなされ、アメリカのボウルズ・ギンタス、アップル以来の教育不平等論や欧州のバーンステインやブルデューなどの「文化的再生産論」が形成されている⁽⁵⁾。同種の研究は、日本でも、荻谷剛彦、長尾彰夫・池田寛らによって進展されており、近年では工学・教育経済学の領域から、矢野真和の研究がある⁽⁶⁾。それらの研究は学校と社会の関係や「学力・学歴」とその社会効果性の研究が主体であり、還元論的な「社会と教育対応論」が中心である。近年、長尾彰夫・池田寛等はアップル等とともに学校文化研究を深化させ、学校組織、カリキュラム、批判的ジェンダー、マイノリティ研究と連動した教育の文化性や実践性への展望がなされつつあるが、やはり学校教育中心である⁽⁷⁾。それらの研究との関連において、古典的なP、ウィリスの労働者子弟の独自文化の研究があるが⁽⁸⁾、彼の研究も对学校関係の研究であり、学校外の家庭教育や地域教育の独自の発達・社会的意義や役割の研究は皆無であり、今後の課題として残されている。

生活体験学習の社会的意義研究は、先行研究をふまえて、(1)学校教育地平を超えること、(2)いわゆる基底還元論を超え、教育実践論として形成すること、(3)教育の社会規定の側面だけではなく、社会への教育改革の側面を明らかにしていくことが可能であるし、進展

させていくことが求められている。

4. 生活体験学習による「家族学習」再生

(1) 生活体験学習の基本性格

生活体験学習の社会的意義を明らかにする前提として、生活体験学習の性格を明らかにしておきたい。というのも、こどもの体験学習は多重構造であり、基本性格を限定しなければ、その特定機能を明らかにしえないからである。筆者は、こどもの体験学習は大別して4構造から構成されると考える。こどもの体験構造は、(1)遊び体験学習、(2)自然体験学習、(3)〈学校〉科学・技術の発展体験学習、(4)生活・社会体験学習から構成され⁽⁹⁾、それらの体験学習は相互に規定している。

図が示すように、こどもの基底体験学習といえる、遊び体験、自然体験、科学・技術体験の3基底体験を基底として、生活・社会体験学習は形成される。

その内容構成については、筆者は試論として基本的に以下の10領域に大別する領域を提起した⁽¹⁰⁾。

- ①生理・身体性
- ②食生活性
- ③衣服などのファッション性
- ④住生活性
- ⑤仕事性
- ⑥生活言語性
- ⑦文化性
- ⑧人間・社会関係性
- ⑨情報性
- ⑩生活行事性

言うまでもないが、それらの生活体験学習は家庭だけでなく、地域社会や関連教育施設で展開される。

(2) 生活体験学習と家族・家族学習の創造

現代家庭教育の再生・創造には、現代家庭自体の再生・創造をとることが不可欠である。「個化する社会」においては、現代家族自体がリスクという状況を示しており、家族は「居場所」どころか、「家族崩壊」のなかで子どもばかりか家族成員は深い孤独状況を呈している⁽¹¹⁾。

「家族のゆくえ」を問うには、その機能性と社会・政策性の双方から把握する必要があるが⁽¹²⁾、その基本視角として森岡清美の「生活者」の視角を設定したい。筆者は、家族の機能性を問う視点として、生活機能性

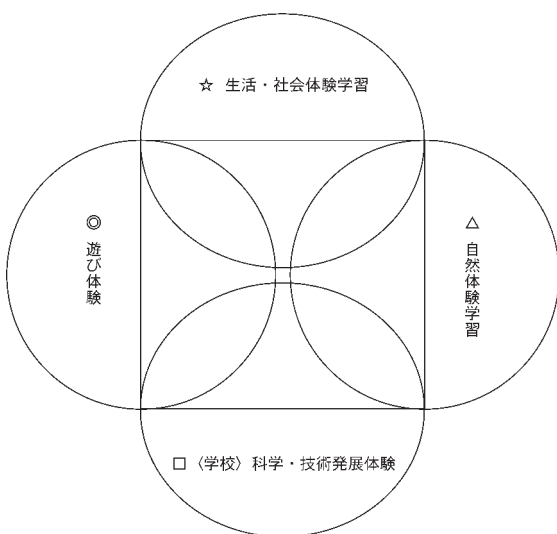


図1 こどもの体験学習

と家族関係性を基軸に、以下のような4タイプの家族型を析出した⁽¹³⁾。

A、直系拡大家族形態の「イエ」型—機能性は生産・生活機能等多機能性をもち、関係性は相互扶助関係

B、核家族形態の「マイホーム」型—機能性は愛情・成員の社会化が中心の単機能性で、関係性は相互愛着関係

C、心理的単身形態の「ミーイズム」型—機能性は外部依存性であり、関係性は孤立関係

D、協同家族形態の「コーポレート」型—機能性は基本生活文化性で、関係性は個ネットワーク関係

現実にはC型の家族が主導的であるが、これからの家族再生・創造の基本方向はD型の協同性、生活文化性を基軸とした家族創造が求められていると考えられる。

筆者は、現代家庭教育の再生論を企図して、『『家族学習』のあり方と支援に関する研究』を提起した。その論文において、現代家庭教育の再生を図るには、新たな「家族学習」概念の形成が不可欠であり、家族学習の独自の内容として、以下の9領域の学習・活動を構造化した。

- ①「愛」学習・活動
- ②基礎身体学習・活動
- ③言語・情報学習・活動
- ④生活基本力学習・活動
- ⑤人間関係学習・活動
- ⑥遊・文化学習・活動
- ⑦課題学習・活動
- ⑧集団生活学習・活動
- ⑨価値修得・進路学習・活動

このような家族学習の内容構成は、従来の「しつけ」内容では現代の家庭教育を存立させえないこと、さらに、現代家庭教育は基本的に生活体験学習を基本として再編成していくことを求められていることを示すものである。言い換えれば、生活体験学習内容を基本学習内容として設定することにより、現代家庭教育は再生・創造されると言える。

(3) 家族学習における生活体験学習推進

家族学習において、生活体験が推進されるには、以下の要件が基本的に重視される必要がある。

第1に、展開される生活体験は基礎レベルのものに

止まらず、創造・発展的レベルの生活文化を内容として展開することが重要である。

第2に、生活体験は学習だけでなく、活動・実働として実践的に推進することが基本である。

第3に、少年・少女だけでなく、親や祖父母など大人も協同学習者として参加することが重要であり、特に父親や祖父の参画が不可欠である。

第4に、少年・少女も家族生活の被保護者的位置づけだけでなく、家庭生活の主體的担い手として位置づることが基本である。したがって、その学習・活動は補助的「手伝い」レベルではなく、一定の本格的学習・活動として取り組むことが、その成就感や責性感を形成することになる。

第5に、第4とも関連するが、少年・少女も「与えられる」学習・活動でなく、少年・少女も企画に参画していくことが重要である。

第6に、「友愛家族」と協同して取り組んだり、地域社会の生活体験学習に発展させたり、場合によっては、地域社会の生活体験学習と協同して取り組まれることが、内容を豊かにさせる。

注

- (1) a、猪山勝利「こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究」『生活体験学習研究 Vol. 1』日本生活体験学習学会 2001年
- b、猪山勝利「こどもの身体形成と生活体験」『生活体験学習研究 Vol. 2』日本生活体験学習学会 2002年
- c、猪山勝利「公民館を通学合宿の場に」『月刊公民館』2001年11月号 全国公民館連合会 2001年
- (2) 猪山勝利、前掲a論文参照
- (3) 猪山勝利「こどもの地域創造参画に関する研究—地域こども文化を中心として—」平成9年度長崎大学生涯学習教育研究センター年報 1998年
- (4) 猪山勝利、前掲論文c参
- (5) 長尾彰夫、池田寛『学校文化』東信堂 1990年
- (6) 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機』有信堂 2001年
- (7) 矢野真和『教育社会の設計』東大出版会 2001年
- (8) 長尾彰夫、池田寛『学校文化の挑戦』東信堂 1993年

- (8) P. ウィリス『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房 1985年 年
- (9) 猪山勝利、前掲 a 論文
- (10) 猪山勝利、前掲 a 論文
- (11) 山田昌弘『家族というリスク』経草書房 2001年
青木信人『家族崩壊と子どもたち』青弓社 1993
- (12) 森岡清美、望月高『新しい家族社会学 4 訂版』培風館 2003年
- (13) 猪山勝利「家族学習のあり方と支援に関する研究」長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第2号 2003年